

の展望を開くものであったと考えられるのである。

- *1碑文論争とは、原爆慰霊碑の碑文「安らかに眠って下さい／過ちは繰返しませぬから」のうちの、「過ちは繰返しませぬから」の主語と文全体の解釈について行われた論争のことである。
- *2平岡敬『希望のヒロシマ』（岩波新書452、岩波書店、平成8年）64～65頁。
- *3『中国新聞』・『読売新聞』昭和62年5月19日。
- *4『読売新聞』・『中国新聞』昭和62年10月28日。
- *5『朝日新聞』・『読売新聞』・『中国新聞』昭和62年11月28日。
- *6『毎日新聞』昭和63年3月4日。
- *7『中国新聞』平成2年2月24日。
- *8『平和宣言1991(H3)』『平岡敬関係文書』広島大学文書館蔵。本史料は、平岡氏の手によって平和宣言の草稿および関連資料が一括して封筒に詰められたものである。以下、本節では特に断らない限り同封筒に残された史料に基づく。
- *9前掲『希望のヒロシマ』70～71頁。
- *10内訳は、「広島市長が平和宣言について意見を伺う会合」の参加者が2名、広島平和文化センターの関係者が1名である。

- *11前掲『希望のヒロシマ』141～144頁。
- *12昭和45年に日本に密航してきた孫振斗氏が、被爆者健康手帳の交付と原爆症の治療を受けるために日本での在留を認めるよう起こした裁判である。昭和53年3月30日に最高裁は原告の主張を認め、「『原爆医療法』は、被爆による健康上の障害の特異性と重大性のゆえに、その救済について内外人を区別すべきではないとしたものにほかならず、同法が国家補償の趣旨をあわせもつもの」という判断を示した。この判決を契機に在韓被爆者の被爆者健康手帳取得が認められるようになった。
- *13前掲『希望のヒロシマ』61頁。平岡氏が集めた在韓被爆者関係の史料は、現在、広島大学文書館において公開している（広島大学文書館編『平岡敬関係文書目録』広島大学平和科学研究センター、平成17年7月）。同史料の中には、治療や援護を訴える在韓被爆者の書翰が多数含まれている（拙稿「解題」参照）。
- *14「平岡敬功績調査」（広島市作成）。本史料は平岡氏への聞き取り調査に際して同氏より提供をうけたものである。竹下虎之助『地方自治とは何か』（現代史料出版、平成18年）349～350頁。竹下氏は当時の広島県知事。
- *15平岡敬「私の平和論—ヒロシマをめぐる—」広島大学文書館編『広島から世界の平和について考える』（現代史料出版、平成18年）所収。



京都大学大学文書館
助 教
河 西 秀 哉

天皇制と アジア・太平洋戦争の記憶 —城山三郎『大義の末』から—

ぼくは戦争中のぼくたちが空白であったなどと考えたくない。あれほど、すさまじいエネルギーを出し切った時期、良いにせよ悪いにせよ、自分たちの人間性のすべてを賭け切った時期が空白であり、現在の自分と全然無縁なものとは考えられない。評価はどうでもいい。確実に燃焼し切っていた自分の存在を確認したい。たしかめたいのだ。

城山三郎『大義の末』

（1959年、五月書房、後に角川文庫）

城山三郎とアジア・太平洋戦争

作家城山三郎は1927（昭和2）年に名古屋で生まれた。その成長期はアジア・太平洋戦争の真っただ中にあったと言ってもよい。城山は名古屋商業学校を卒業後、志願して海軍特別幹部練習生として入隊する。理科系の専門学校への進学が決定していたのを蹴り、わざわざ徴兵猶予の措置を取り消してまでの志願であった。

城山がそこまでの軍国少年となった背景には、1938年に出版されて10万部以上ものベストセラーとなっていた杉本五郎陸軍中佐の『大義』の存在がある。『大義』は「国家は天皇のためにあり」「天皇精神発動に依る戦争は領土拡張に非ず、人類救済なり」との文面に代表されるように、徹底的な尊皇・

忠君愛国を説いた書であった。しかし『大義』はその原理的な思考ゆえ、中国戦線における陸軍の殺戮行為を批判し、そのような陸軍は皇軍ではないと強く言い放っていた。城山はこの『大義』を読み、そこに書かれた精神こそが「純粋」であると感動してその世界に引き込まれ、軍へ志願したのである。

しかし入隊した城山を待ち受けていたのは、過酷な訓練と非人間的とも言える軍隊生活であった。それは、『大義』の「純粋」さからはかけ離れた世界であったと言ってもよいだろう。その後敗戦を迎え、軍隊は解体し、天皇制は「民主化」され、戦前の社会・思想構造は大きく変化が迫られた。しかし城山は、それまで信じていた『大義』の世界をすぐに捨て去ることはできなかった。城山は後にその状態を「救いようのない混乱」と回想しているが、ジョン・ダワーの言葉を借りれば、「虚脱」状態であったのかもしれない。敗戦後、城山はそうした状態にもがき苦しみながら、『大義』の世界、そして天皇制を見つめ直していった。「天皇とは果して何であるのか。この問いかけだけで私たちの一生のもっとも大事な部分は終わってしまった感じがする」「『天皇』という観念と如何にとり組むかということだけで、その青春は終わっていた」という城山の言葉からは、彼の世代が敗戦後、いかに敗戦前の社会や戦争、天皇制と対峙しなければならなかったかということを感じ取ることができる。彼らは、多くの人々のように象徴天皇制を無条件に受け入れることはできなかった。彼らにとっては、天皇制こそアジア・太平洋戦争の表象そのものであった。

『大義の末』

そして1959年、城山は自伝的要素を強く反映させた『大義の末』を発表した。主人公の柿見は教師から薦められた『大義』に深く感銘し、入隊する。彼は「陛下の銃」を守って歯を折り、友人の種村は

「菊の御紋」を傷つけないために転倒して死んでしまう。彼らは純に『大義』の世界に心酔し、それを実行したのである。しかし敗戦後、『大義』の世界はまるでなかったかのように人々に変質する。柿見はそこに戸惑いを見せる。『大義』の世界は何だったのかと。人々はなぜそのように無責任に変容できるのか。種村は心酔して命まで落としたのにも拘わらず、それがなかったと言えるのか。そして本稿冒頭の柿見の独白に繋がる。柿見は敗戦後も、『大義』の世界、そして天皇制と対峙することで、自らの存在を確かめようとする。

柿見は『大義』の世界に賭けたそれを、皇太子に求めていく。皇太子に「呪縛されそうな硬質の親愛感」を抱くことで、『大義』に続くものを発見したのである。しかし、人々はその皇太子を「皇太子殿下」「皇太子様」と呼び、「遠くへ運び去」ろうとする。そのように都合良く天皇制を利用することに対し、柿見は「セガレ」と呼ぶことで「親愛感」を保ち、人々の振るまいを拒絶しようと考えたが、成功せずに終わる。人々が皇太子を「歓迎」していくことこそ、天皇制が様々な勢力によって利用されつつある現状を物語った。柿見にとってそれは、敗戦後において再び『大義』のような世界が立ち現れることを意味した。柿見は再び深い闇の中でもがき苦しまなければならなかったのである。

天皇と皇太子

『大義の末』の中で、主人公の柿見が在学する旧制H高校に皇太子がやって来る場面がある。柿見はそこで、前述のように皇太子に「親愛感」を抱く。これは、城山が在学していた東京商科大学（現・一橋大学）への皇太子訪問のことである。「供一人連れただけの少年皇太子の清純な像は、私の心に切迫した親愛感を与えた」と述べるように、柿見はこの時の城山自身であった。アジア・太平洋戦争についての責任は皇太子にはないと認識し、商科大における皇太子の戸惑った行動が、自分たちと同じように悩み苦しむ青年のそれとして城山には写ったのである。皇太子が戦争と切り離されたイメージであったことが、城山に皇太子への「親愛感」を抱かせる大きな要因となった。『大義』の世界はまるでなかったかのように変質した人々とは違い、天皇制という制度の中でぎこちなく振る舞う皇太子に、城山は悩み苦しむ自らの像を重ね合わせたのかもしれない。

一方『大義の末』には、K大学における天皇巡幸

の場面も描かれている。これは、1951年に起きた京大天皇事件である。京大天皇事件については、「1950年代初頭における象徴天皇像の相剋—京都大学天皇事件の検討を通じて—」（『日本史研究』502号、2004年）の中で詳しく書いたので、参照いただきたい。柿見は其中で出された「公開質問状」に深く共感する。「公開質問状」は天皇に呼びかける形で書かれ、「逆コース」によって再びまつりあげられようとする天皇に対して主体的に行動することを求めている。学生は、一人の人間としての天皇を求めているのだと柿見は捉えた。城山は天皇個人に対して複雑な感情を抱いている。「天皇は天皇なりに一生懸命生きてきた」が、戦争の「影」を負った存在であると。天皇自身に、人々に利用されていく天皇制という制度の影を読み取ったのかもしれない。

天皇制への対決

城山は「皇太子御成婚」後の1959年6月、『婦人公論』に「天皇制への対決」という文章を寄せている。皇太子に「親愛感」を抱いていた城山は、ミッチー・ブームという騒がれ方に違和感を感じた。そこに、「人間的な結婚で、かえって非人間的にまつり上げ」る、そうした人々の「無責任な祝い方」を読み取り、ブームを利用しようとする人々の存在、そしてそこから次第に『大義』のような世界へと変質してしまう危険性を説いている。一見平和であるかのようなブームが、戦争と背理である恐怖。城山の指摘からは、天皇制が戦争の記憶と密接に結びつきながらも、過去を清算しなかったことへの強い憤りと、形を変えて再びあっけらかんと利用しようとする人々への批判を読み取ることができる。戦争イメージのない皇太子という存在までもが、変容させられてしまう危険。城山の思考は彼ら自身の年代特有の感情とも言えるかもしれない。しかし一方で、私達が戦争責任や天皇制の問題を考える上で、気づかない重要な示唆を与えてくれるように思うのは、私だけであろうか。

